

ちのイモ畑を掘ってみてからにしてくれ」と奉行に直訴した。そこで役人が出張してきて掘ってみると、ほんとうに普通の畑の倍以上もあり、作付面積と甘藷問屋の帳簿とが合った。

おかげでイモ泥棒の疑いが晴れ、仁兵衛はかえって奉行から一層研究するようにと励まされた。こうして仁兵衛のスタートは波瀾に富んだものだったが、その後はかえって研究しやすくなり、村人たちからも教を乞われるようになった。

実験中心主義

小学校もなかった頃に生まれた仁兵衛の先生は、なによりも実験だった。サツマイモの増収にとって、少しでも良いと思われることは片っ端から実験している。そして結果の良かったものだけを真理とした。

こうして彼はサツマイモの増収法を開発し

つつ、それで借金を返し、畑を買い増して、ついには2町歩もの畑持ちになった。しかもその間に、乞われれば、だれにでも増収法を伝授した。それを集大成したのが、『赤沢仁兵衛実験甘藷栽培法』であり、ここにも「実験」の文字が大きく出ている。

では、その要点はどんなことだったのだろう。「苗半作」ということばがあるように、サツマイモ作りの最大のポイントは苗にある。

種芋を吟味し、高設温床の管理に注意して、太くて、かたい、節が詰まった苗を作る。

肥料は多投。従来は肥料をやると地上部が徒長しすぎてイモができないとされていたが、増収には肥料を多投したほうが良い。

1反当り、堆肥、300貫、米ヌカ、60貫、わら灰、20貫は入れたい。

<梅毒とジャガイモ>

マルコポーロの『東方見聞録』によって刺激されたコロンブスが、黄金を求めて大西洋を横断し、1492年に西インド諸島を発見して以来、征服者、探検家、あるいは移民などが続々と新世界を目指した。この結果、多くの植物が新世界からヨーロッパへ持ち込まれた。その中の根菜類としては、ジャガイモ、サツマイモ、タピオカイモ、ヤマイモなど、果実類としては、トマト、パパイア、バナナ、イチゴなど。そのほかカボチャ、トウモロコシ、トウガラシ、コカ、ナンキンマメもあった。これらの中では、ジャガイモが最高の贈物であったと言えよう。これらの大部分は、今日私どもの日常生活に不可欠なものとなっている。しかし、新大陸から入ったものとは気がつかないことが多い。たとえば、トマトはヨーロッパ、ナンキンマメは中国生まれと思われることが多い。動物では、七面鳥が新大陸から入っており、タバコや梅毒も入ってきている。

梅毒は、中米ハイチ島あたりの原住民の一種の風土病であったと言われているが、コロンブス一行によってヨーロッパに持ち込まれ、わが国には永正9年(1512年)に入っている。ポルトガル人が初めてわが国へやってきたのは天文10年(1541年)であるから、梅毒は西洋人より一足先にわが国へやってきたわけである。つまり、梅毒はコロンブス後わずか20年で日本にきたが、ジャガイモでは5、60年もかかってきた。

<一味同心>

昭和62年ゴッホの絵「ひまわり」を安田火災が約53億円で落札し、話題になった。翌63年12月には、オランダ東部の都市ロッテルムの国立クレラー・ミュラー美術館に何者かが侵入し、ゴッホの絵「ジャガイモを食べる人々」(Potato eaters)や「赤いひまわり」など計3点(合計数千ドル相当)を持ち去ったという。「ジャガイモを食べる人々」は、「ひまわり」に匹敵する価値があり、その行方が心配である。この絵は、つましい食卓に向かった光景を描いた油絵3連作の1つで、ゴッホ初期の傑作とされている。1日の仕事を終え帽子をかぶったままのまづしい農民が、ランプの下で1つ皿に盛ったジャガイモを素手で食べている風景、つまり、いわゆる「同じ釜の飯を食った仲」を描いたもの。飯場の一緒の部屋で過ごしたり、学生寮で袋入りポテトチップをいつも食べている「イモダチ」を描いたとも言える。「食べられることの有難さ」を知らない世代では、芋よりも仲間とつまむチップスの中に、共通の心が育っている。西洋でもナイフやフォークは、昔からあった訳ではない。大皿から直接手でつかんで食事をする習慣は各地にある。国、時代、文明が違っても、一味同心は心が通じあう。

仏語アミ・シャネルは、「骨肉の友」、「血のつながった、親しい仲」のことであり、英語のコンパニオンは「仲間」の意味で、原義は「ひとつのパンを食べあう人達」で11世紀末にできた言葉のようである。

(北海道立中央農業試験場主任研究員 浅間和夫)